

学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘はいつしかひびく



八戸市立 小中野中学校

平成28年9月7日(水)

No.58

文責：校長
工藤聡

田村理華さんの投書から

3年1組の田村理華さんの「私も壁を乗り越えたい」という文章が、9月3日発行のデリー東北新聞の“若いこだま”という投書欄に掲載されました。以下は、その全文です。

リオ五輪女子レスリングで、伊調馨選手が4連覇の偉業を達成しました。私は、6歳から八戸クラブでレスリングを習っています。偉大な馨選手が在籍していたクラブで練習できることを誇りに思いますし、自慢です。

馨選手がここまで来るのにどれだけの努力をしたのか、どのくらいの練習量をこなしたのか、私には見当もつきません。試合後に「みんなが助けてくれた」と話していました。4連覇するまでいろいろな壁があったと思います。やめたい時も何度もあったと思います。どうして乗り越えられたのでしょうか。「死んでも勝て」と言ったお母さん、千春先生、お父さん、お兄さん、周りでサポートしてくれるみんなの力が全てを乗り越えさせたのだと思います。

試合当日、「はっち」のバブリックビューイングで応援のお手伝いをしました。この応援に、たくさんの方々が携わっていることに驚きました。市スポーツ振興課の方々、はっちの方々、応援団の皆さん、クラブのコーチ陣…。小林市長も最後までいてくださいました。みんなが一丸となって4連覇を願い、応援できたことは、この夏の貴重な経験となりました。

私には来年の受験という大きな壁があります。今は少しへこたれていますが、伊調馨選手のように全てを乗り越えて、合格＝金メダルを手に入れたいと思います。待っててください。必ず手に入れます。

田村さんは、校長室の清掃当番です。だいたい私が掃除機をかけ、田村さんが水拭きをするのが日課（ニッカ：毎日決まってする仕事のこと）です。お互いの仕事をしながら、いろいろなことを話します。私の若い頃の失敗談やそれぞれの家族のことなどです。もしかすると、田村さんは私に無理して話を合わせてくれているのかもしれませんが、私としては大変楽しい時間です。話のなかには、リオオリンピックの日本選手の活躍もありました。

先週の水曜日のことです。朝、玄関にいと、登校して来た田村さんから、「先生、昨日デリー東北からお母さんに電話がきて、土曜日に私の投書が新聞に載ることになりました。でも、石澤先生をびっくりさせたいから、まだ言わないでください。」ということを知りました。そこで、土曜日は5時に起きて、近くのコンビニに新聞を買いに行ったのです。月曜日の掃除の時間に、どうして投書することにしたのかを田村さんに聞きました。田村さんは「お母さんから、『1つのことを大勢でやっていることには大きな意味がある。オリンピックでも伊調選手のレスリングの応援でも、多くの人がかかわっている。そういうことについて書いてみたら…。』とすすめられたからです。」と答えてくれました。

小学生でも、高校生でも、もちろん中学生でも、いろいろなことを真剣に考えてみることは、自分の人格を形成していくうえで、とても大切なことです。それぞれの年齢やカテゴリーで考えは違いますが、それでも一生懸命考えてみることは、自分の生き方により影響を与えることになるのだと思います。田村さんは、伊調選手の4連覇とそれを応援する人たち、そして自分の受験をつなぎあわせて、自分自身も頑張りたい…としています。もしかすると、それがリオ五輪でいろいろなメダリストがインタビューで答えていた“周囲の人に力をもらった”ということではないでしょうか。